

自己調整学習を主題とする ビデオとオンラインレポートを活用した授業の実践と評価

Practice and Evaluation of a Lesson on the Subject of Self-regulated Learning Using Video Content and Online Report Submission

仲林 清^{*1}

Kiyoshi NAKABAYASHI^{*1}

^{*1}千葉工業大学 情報科学部

^{*1} Faculty of Information and Computer Science, Chiba Institute of Technology

Email: knaka@net.it-chiba.ac.jp

あらまし: 自己調整学習の概念や方略を、学習者が意識して活用することを促進するための授業の試行と評価を行った。大学1年生の学生を対象に、学習理論や自己調整学習に関する知識を与えたのち、これらの理論の観点から、中学生の学習の様子を描いたドキュメンタリービデオを視聴させた。その後、自らの学習経験とビデオの内容を対比したレポートを提出させた。入学時と授業後アンケートの比較から、学習者の学習経験と授業評価の関係を調べた。

キーワード: 自己調整学習, ドキュメンタリービデオ, 学び方の学習, 既有知識の活用

1. はじめに

急速な社会構造の変化に対応するために、自律的に学び続ける能力の重要性が叫ばれており、21世紀型スキルの中にも“Learning to Learn and Metacognition”が位置付けられている⁽¹⁾。本稿では、大学生を対象に、自己調整学習⁽²⁾などの学習に関する学術的・体系的知識と自らの学習経験とを結びつけて内省・概念化させ、以後の学習活動におけるメタ認知や学習方略の活用を促進することを意図した授業実践について述べる⁽³⁾。

2. 学習主題

本授業では、自己調整学習⁽²⁾を中心に学習理論や学習の動機づけを取り上げる。自己調整とは、教育目標の達成を目指して学習者が自ら作り出す思考・感情・行為であり、学習過程において、メタ認知・動機付け・行動に能動的に関与することを自己調整と呼ぶ。特に、自己調整学習方略・自己効力感・目標への関与が重要とされている。

自己調整学習は、予見段階、遂行段階、自己内省段階からなる個人的フィードバック・ループとしてモデル化される。本授業実践では、後述するドキュメンタリービデオの内容との関連から、以下を具体的な学習主題とした。

(1) 予見段階における目標設定・動機付け・自己効力感

予見段階では、学習に先立ち学習を自己調整する準備と自己動機付けを行う。準備では、課題の目標設定や課題を解く方略の計画立てが行われる。動機付けは、自己効力、結果予期、課題興味などに依っていて、課題の目標設定や方略計画に関係している。自己調整学習に上達した学習者は、明確で具体的な目標設定や計画を立てることができ、これによって、自己効力や結果予期に起因する高い動機を得る。

(2) 遂行過程のセルフ・モニタリング

遂行段階は、実際の学習や課題解決に対応し、セルフ・コントロールと自己観察からなっている。このうち、自己観察は、メタ認知モニタリング(セルフ・モニタリング)と自己記録が含まれる。自己調整学習に上達した学習者は、遂行過程のセルフ・モニタリングを行い、これに基づいてセルフ・コントロールを行って方略を修正していくことができる。

(3) 自己内省段階における自己評価や原因帰属、それによる適応的/防衛的反応

自己内省段階は、学習や課題解決の結果に関わる段階で、この段階が次の学習の予見段階に影響する。自己内省段階には、自己判断と自己反応が含まれる。自己判断は、遂行結果を目標基準と比較する自己評価、および、遂行結果の原因を能力・努力・方略使用などの原因と結びつける原因帰属からなる。自己反応は、自己満足/感情と適応的/防衛的決定に分類される。前者は自己判断に対する情動的な決定で、一般に、学習者はマイナスの感情を生じる学習活動を避ける傾向がある。適応的決定は、使用した方略が良くなかったという原因帰属を行った場合に、次回は方略を修正する、といった決定を行うことである。逆に、防衛的決定は、能力に原因を帰属させ、マイナスの感情から逃れるために遅延や課題回避を行うことである。自己調整学習に上達した学習者は、自己評価を行い、努力や方略に原因を帰属し、これらを修正する適応的決定を行うことができる。

(4) 自己調整学習を促進するための教師の介入

教師は、自己調整学習を促進するために、命令や指示といった「統制的教授行動」をとるのではなく、「自律性支援的教授行動」をとることが望ましい。このような教授行動には、「学習者がしたいことを尋ねる」、「理由を説明する」、「フィードバックでほめる」などが含まれる。

3. 授業設計

本授業の対象の大学生は、メタ認知や自己調整学習の能力を誰もが身につけているわけではないが、小中等の学習者に比べれば、前節のような学術的・体系的知識を理解するのに十分な知的水準を有していると仮定できる。また、学習過程に関する経験があり、これを客観的に振り返る能力も有していると期待できる。そこで、これらの学術的・体系的知識と学習者自身の経験・既有知識とを結びつけさせて内省・概念化を促進する。

前章の学習主題は、かなり複雑な内容であり、知識付与型の学習手法では、学習者の興味を引き出すことが難しい。そこで、筆者が組織における問題解決などの学習に適用して効果を確認したドキュメンタリービデオとオンラインレポート提出を組み合わせた授業設計の枠組み⁽⁴⁾を適用する。授業設計の枠組みを図1に示す。学習の主題に即したドキュメンタリーを視聴させ、これに関するレポートを課す。次の授業直前までにレポートをオンラインで集約して授業で配布し、教員が内容を適宜紹介する。これを必要に応じて繰り返す。

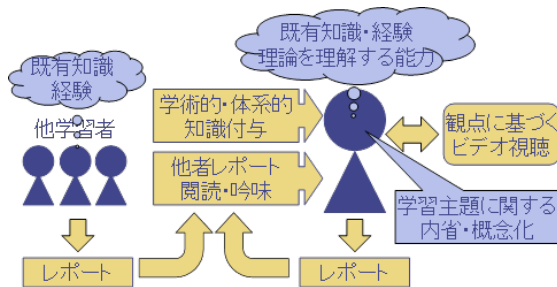


図1 授業設計の枠組み

本授業では2本のビデオを使用した。うち1本は、NHKの「あしたをつかめ」というシリーズの「#33 塾講師」(以下、塾講師)である。塾講師と上司、および、女子中学生が主な登場人物である。中学生は数学が苦手な成績が伸びずやる気を失っている。講師との面談では「周りが天才だから」と発言する。講師は、努力すれば成績が伸びることを伝えたいと上司に相談し、上司は、自発的に勉強させる施策が大事だ、とアドバイスする。講師は自習ノートを生徒に渡し、科目を自分で選んで目標を書いて自習するように告げる。生徒は、科目を数学に決め、「その日間違ったところを復習する」という目標を決める。この結果、次の小テストで1回で合格する。

上記の生徒の言動は、自己調整学習の観点から以下のように解釈できる。生徒は、数学に苦手意識があり、自己効力感がない。「周りが天才だから」という発言から、成績の悪さを能力に原因帰属していることがうかがえる。また、間違えたところを振り返ることもしておらず、防衛的な感情が出ていて、適応的な決定ができていない。それに対して講師は、適応的な決定を促すために、自習する科目・目標を自

分で決めるように告げて、予見段階における目標設定を促し、また自習ノートによる努力の可視化の仕組みを作っている。これに対して生徒は、「数学でその日間違ったところを復習する」という近時的で具体的な学習目標を自分で決め、この結果、小テストに合格し、プラスの感情を得ることができた。

授業では、1コマ目に「塾講師」のビデオ、2コマ目に他のビデオ、3コマ目に両方のビデオを視聴させて、授業内で適宜解説した自己調整学習理論の観点からレポートを提出させた。ビデオは理論を解説した教材ではないので、学習者は、自身の経験と理論や他学習者のレポートを能動的に結び付けて考察しレポートを提出する必要がある。

4. 実践評価

2015年の前期に授業を実施した。対象は情報系学科の1年生である。事前に行った入学時アンケートと授業後アンケートの結果を表1に示す(n=100, 7件法)。授業後アンケート項目では、目的とした効果が得られたことがうかがえる。また、入学時アンケートの項番1,3と正の相関、項番2と負の相関がみられ、学習者の特性と学習効果に関係があることがうかがえる。

表1 入学時(1~3)・授業後(4~6)アンケート

項番	質問	1	2	3	4	5	6
1	働くことを通じて成長していきたい	—	-.31**	.46**	.27**	.26*	.31**
2	文を書く時考えをまとめるのに苦労する	-.31**	—	-.23*	-.11	-.33**	-.24*
3	勉強のやる気を出すために工夫している	.46**	-.23*	—	.18*	.24*	.33**
4	今後の学習を進めるうえで参考になった	.27**	-.11	.18*	—	.49**	.47**
5	「学び方」に関する考え方が深まった	.26*	-.33**	.24*	.49**	—	.58**
6	自分の経験と結びついた	.31**	-.24*	.33**	.47**	.58**	—
平均(S.D.)		6.00 (1.06)	5.24 (1.43)	4.73 (1.31)	5.52 (1.11)	5.71 (0.89)	5.65 (0.91)

[†]: p < 0.1, * : p < 0.05, ** : p < 0.01
赤字 : 正の有意な相関, 青字 : 負の有意な相関

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26560127 の助成を受けた。

参考文献

- (1) P.グリフィン, 他(編), 三宅なほみ, 他(監訳): “21世紀型スキル: 学びと評価の新たなカタチ”, 北大路書房(2014)
- (2) Schunk, D. H. and Zimmerman, B. J.: “Self-Regulated Learning: From Teaching to Self-Reflective Practice”, Guilford Press(1998)
- (3) 仲林 清: “自己調整学習を主題とするビデオとオンラインレポートを活用した授業の学習者意識調査”, 教育システム情報学会研究報告, 31(1), pp.51-58(2016)
- (4) 仲林 清: “組織における問題解決を主題とするビデオとオンラインレポートを活用した授業実践”, 教育システム情報学会誌, Vol.32, No.2, pp.171-185(2015)